



# ピッポ新聞

2006  
1  
No.205

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

## ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

### やっぱり今冬もハケ岳

今年の冬は寒く、雪が多いということがメディアから流れていたもので、覚悟して出かけた冬山だった。ところが、茅野駅に着いても雪を見ることはなかった。駅前からタクシーで渋の湯まで行くことにしていたが、念のためバス停で時刻を確認したが、やはり臨時なんかでておらず、時刻表通りに一日3便しか走っていないようだ。(たしかこんなタイトルの梶山俊夫の絵本があったっけ。一日3回走るバス。だったかな?) バスでいくなら、後2時間近くも待たなければ



いざ、出発! 中山峠 (2400 麓)

ならない。予定通りタクシーを奮発することにした。こんな中途半端な時間に着いたのは、いつもの年は新宿から夜行か、東京に泊まって一番の特急で出かけてくるのだが、今回は仕事の都合で、きょう

十二月三十日に家を出て、身延線できたのでこの時間(昼近い)になってしまったのだ。よく

は師走の東京をぶらぶらするのも好きなのですがね。

雪は渋の湯の間近になってようやく道路にも積もっていた。タクシーの運転手さんが、駐車場に止めてある車を見て「今年は登山客が少ない」と言っていた。茅野駅からここまで6960円の料金だった。

登山道の入り口にある遭対協の小屋に登山届けを提出して、きょうの宿泊予定の黒百合ヒュッテに向けて出発だ!

樹林の中のつづら折れの急な登山道を登っていく。ここまで来るとやはり今年の雪は多い事を実感する。1 麓ほど積もった雪の上につけられたトレースをたどる。2 時間ちよつとで黒百合ヒュッテに到着した。3 年前にここまで3時間半かかり、倒れ込むようにたどり着いたことを思えば、ダイエットと週一回の日本平へのジョギングが効果を発揮したようだ。

きょうは三十日だが、三年前に比べれば、タクシーの運転手さんがいっていたようにやはり登山客は少ないようである。この夜、黒百合ヒュッテに泊まった客は三十人だった。160名泊まれるこの小屋に三十名だから、この夜はユツタリと寝ることが出来た。これが満員近くだと布団一枚に二人という状態になることを考えれば天国だ。

そつた、黒百合ヒュッテで三年前と大きく変わったのはトイレが小屋の中にできたことで、ここはそれまでは一旦外に出て(山小屋ではそれが普通だ。赤岳頂上小屋なんて昔はアイゼンを付けてトイレにいかなければ滑落の危険がある場

所にトイレがあったけど、こちらも今は小屋の中にある。トイレに行くのだが、夜など氷点下十五度くらいに下がるから結構覚悟がいたのであった。

それと、今年はピアノを弾く人がいなかったのか、ピアノからは一度も音が流れることが無かった。密かに期待していたのに残念だ。

明けて大晦日、快晴だ！きょうの予定はとにかく硫黄岳まで縦走することだ。そこから先は成り行き次第。

アイゼンを小屋前で付けて、七時十七分出発。踏み固められたトレースの上をアイゼンが雪をとらえる「キシキシ」という小気味よい音を楽しみながら登っていく。こちらは単独行で身軽(と言っても十二キロほど背負っているが)なので、途中3パーティを追い越した。一時間十五分ほどで東天狗岳の頂上に着く。

素晴らしじゃないか！



もうじき天狗岳の頂上かな？

360度の展望が見渡す限り展開していた。特に北アルプス方面を見ると白く輝く山並

みはつきりと見え、穂高連峰や後立山連峰の山の山座同定が僕にもできる。こんな好天に恵まれたのは、冬山では何年ぶりだろうか。

写真を撮ったりして、十分ほど留まった。もつとここにいたかったのだが、やはりこの天狗の頂上は風が強く長く留まることは出来ない。

さて、縦走開始だ。まずは根石岳方面にくだる。下りにはいると、頂上では烈風が吹き付けていたが、嘘のように風は止んだ。樹林帯に入ったわけでもないのに不思議だ。

再び根石岳の登りにはいると、風も吹き付けてきた。登山道は根石岳の頂上近くをトラバースして、再び下りに入った。右下には根石山荘が見えている。この辺りは風が強いので、雪が余りついていなくて、石がゴロゴロ露出してアイゼンを付けていると歩きにくい。

ここで、登山道からちよつと外れて根石小屋に寄っていくことにした。根石小屋は風よけのためか広い稜線上の窪地に建っていた。

入り口に立つと、小屋の人が戸を開けてくれ「アイゼンを履いたままどうぞ」と声をかけてくれる。入ると土の土間になっていた。小屋はがらんとしていた。もうこの時間は登山客はみんな出発してしまっただ。

コーヒーを注文し、それができる間も若い小屋番さんと言葉を交わした。時計を見ると九時半だった。黒百合ヒュッテを出て二時間弱でここまで来た事になる。「早い

ですな」と小屋番さんはいっていただけ、僕は急いだつもりは全然なかった。このおなじコースを十三年ほど前に縦走したことを思い出した。

そのときは吹雪で風の強さも半端ではなかったし、視界も十〜二十メートルと、とても悪かった。なにしろ、ぼくの前を歩いていた人が風で大地からひっぺがされるように倒されたのだから。根石岳をいつ通過して、根石小屋が何処にあるかさ確認できなかつたのである。十歩進んでは耐風姿勢をとって吹き付ける風に耐え、様子をみて、また五歩前に進むという事を繰り返していたのだからね。

あの時は、朝六時半頃黒百合ヒュッテを出発して、硫黄岳山荘に着いたのが、午後の四時近かつた。とにかくきつかつた。今の体力ではとても不可能だろうな。だから、このコースの景色や地形は初め



天狗岳の頂上

て見たのと同じで、時間も硫黄岳までのかなりの掛かるかもわからなかつたが、小屋番さんは「お昼前に硫黄岳の頂上につきますよ」と言った。ぼくの気持ちは、きょうの天気のようにあかるくゆとりがある。



## 硫黄岳に向けて出発

さて、根石小屋を後に、登山道にもどる。少しの登りを経て、道は樹林帯に入っていく。この道はほぼ並行に夏沢峠に続いていく。雪は木や枝を厚く覆っていて、やはり今年は雪が多いようである。

木漏れ日の射す樹林の登山道を写真に数枚納めたが、帰ってきて見ると残念なことに余りよく撮れていなかった。

四十分ほどで夏沢峠に到着。ここには二つの山小屋が有るが二つとも営業していなかった。

夏沢鉱泉へ下るルート、僕がやってきた天狗岳へのルート、硫黄岳に登るルート、本沢温泉に下るルートと、ここは登山道がいくつかが交差しているため、登山者が多いようだ。風もないので、出発していく人や、やってくる人を見ながら、のんびりしていた。

そろそろ、硫黄岳へ向けて出発だ！ところがいくらかもすすまないうちに、急に僕ももと来た道を引き返したのである。

時間も充分、体調も万全、天気もこの上なく好天。それなのにぼくは、何故そうしたのかは、今でもそのときの気持ちかわからないのだが、硫黄岳登山を止めたのである。

夏沢峠まで引き返し、アイゼンを外して、本沢温泉へ下ったのである。こんな気分は単独行だから許されるのであり、他の人

といっしょだったなら不可だよな。

実は、本沢温泉には以前から一度行ってみたかったのである。この露天風呂にどうしてもはいってみたいかった。今回の山行の目的の一つでもあったのだ。

ただ、当初の予定は硫黄岳に登ってから引き返すか、赤岳まで行くかどちらかにしようと考えていたのである。だから、登らず下るといっなのは予定に無かったのである。僕のどこかに体力の限界まで使うことを避けたいという気持ちがあるのかもしれない。ちよつと前までは考えられないことである。

ということ、本沢温泉に昼前に到着してしまっただけである。宿の側も受け入れ準備が整って



これが日本で一番高所にある露天風呂

いなかったが、入れてくれた。ここでは山小屋と同じ大部屋と千円ほどプラスすると温泉宿的な個室もある。個室を頼む、指定された部屋に行くところには三畳ほどの畳の部屋だった(三畳なんて温泉宿には無いが)。

さっさく露天風呂に入るためタオルとカメラとを持って、宿の長靴を借りて、登山道を十分程登り返した。露天風呂は広がった沢(と言ってても今は雪に覆われているが)

の脇にあった。

屋根のある脱衣場などなく、雪原に木枠の湯船があるだけだった。裸になり寒いので、すぐ風呂の中に飛び込んだ。吹きさらしにあるためか、湯がぬる目であった。雪原の中でただ一人露天風呂にはいつていると、とてもくつろいで気持ちが良い。

ここは冬季の温泉では日本で一番高所にあると説明の杭が建っていた。

杭には2165メートルと記されている。と言うことは、オレは今、そう！2005年十二月三十一日大晦日のこの時、日本で一番高所の風呂をたった一人で独占しているのだ！

「どうだ！」

と言う気分になってもいいよね。

見上げると硫黄岳の頂上に雪煙が上がっていた。頂上では烈風が吹いているのだから。こちらは露天風呂の中からそれを眺めているのだ。

とまあ、ここまでは最高の気分だったが、さて、風呂から出る段になりふと気付いたのである。風呂から出て服を脱いだところまで三メートルほど離れている。雪は湯船の縁まで来ているのだ、それでなくとも湯がぬるいのでさつきから出るにでられないで三十分が経っていたのだ。

さて、どうしよう？決断して湯船から素っ裸で飛び出して雪の上を裸足で歩き、パンツとシャツを湯船の近くまでもってきて、

また風呂に飛び込んだ。そして、いいことを思いついた。

風呂の深さは腰まで有る。まず、立ち上がった、上半身を拭きシャツを着て、それから風呂からでて、雪の上に裸足で立って、パンツをはくのだ。これしかない!

それで服のところまで行き、長靴を横に倒してその上に足を乗つけて、靴下をはき服とズボンをつけたのである。

雪の中の露天風呂は後が苦勞するのである。

宿に戻ると、ようやく談話室の薪ストーブに火を入れてくれるところだった。そこで持参した文庫本を読んでいると、外湯(露天と違いこちらは宿のすぐ近くにあり、小屋になっている)から一人戻ってきた。

その人曰わく、混んでくると外湯は満員で入れなくなると言うので、再度こちらの湯にも入ることにした。こちらには狭いながら脱衣所もあり、一安心だ。

先程の露天風呂は硫黄臭が立ちこめ、湯が白濁していたが、こちらの湯は少し錆色がかかった透明で鉄分を含んだ湯のようだった。ゆっくり湯に浸かって、先程の談話室に戻った。

談話室はさらに人が増えていて、酒盛りが始まっていた。お裾分けをいただいで飲みながら、露天風呂から戻ったという老夫婦の話が面白かった。

それはここの露天風呂の入り方で、この

人たちは、草履とゴミ袋を持参して、風呂の近くに服などをまとめゴミ袋に入れておき、これは以前奥さんの方がパンツを風で飛ばされた結果考えたそうだ。草履は雪を直接踏まないためである。

聞いていて、なるほどと、僕は今日の自分の経験を踏まえて納得がいったのである。

別の人は男女七人でこの露天風呂に入っただ(七人も入るときぎゅうぎゅう詰めの状態)時の話をした。

やはり、湯がぬるいため、出るに出不れず、七人が一時間も入っていたのだという。やることがないので、「ズイツズイツツころばし」を七人で繰り返したのだそうだ。

聞いただけで大の大人が裸で風呂の中で「ズイツズイツツころばし」をやっている姿を想像して僕は吹き出してしまったよ。この男女が風呂から出るとき雪の上でパンツをはくのにどうしたのだろうか? などと言う想像は、僕はしないでおう!

## 明けて二〇〇六年一月一日

温泉で心がふやけてしまった僕はもう、硫黄岳に登り返すなどという気力は消え失せて、このまま佐久側に下ることにした。

宿の人に聞いたら三時間くらいで、稲子温泉にくだれるというし、急ぐのなら、同じ時間くらいで、小海線の海尻の駅にでる

という。僕は稲子温泉まで行き、そこでまた温泉に入っていこうと決めた。

快調にくだって、一つ目のゲートを過ぎ、さらに林道をくだって、車道にでた。ここまでは本当に快調だったのだ。圧雪された車道には、轍がクツキリとついていて、そのことに安心してしまったのか、たいして意識せず、右に歩を進めたのだ。それはなだらかな登りの道で、二十分ほど進んで、どうも道が違うことに気付いたのである。だが、轍が付いているし、迷うことはないだろうと考えて、引き返すことをしなかったのである。この道。車道でありながら行き先の標識など何処まで行っても付いていないのである。しかも車一台通らない。

いつのまにか僕は広い雪でおおわれたゴルフ場の中をさまよって、ようやく見つけたクラブハウス(勿論無人)まで行き、そこで、ゴルフ場から出る道を見つけたのである。

何とそこからさらに人里まで二時間を要したのだ。海尻の駅に着くまで何と六時間半歩いたのである。これが今回の山行で一番きつかったのであった。(終わり)

新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞ宜しく願っています。今年はこちらに古書に力を入れていきたいとおもっています。もう一つ、久しぶりで絵本の原画展を企画しています。乞うご期待!